

「イグナチオは、著名な人物たちの偉業を語っている無益な作り話の書物がかつて愛読していたので、体の具合がよくなると、時間つぶしにそれらの書物を読みたいと思い、病床に持って来るように頼んだ。しかし、家にはそのような本は一冊もなかった。そこで、人々は『キリスト伝』と題する本や、『聖人たちの花』と題する聖人伝を彼のもとに持ってきた。これらの二冊はスペイン語で書かれたものであった。

イグナチオはそれらの本をしばしば読むようになり、読むうちに、その内容に共感をおぼえるようになった。また時々、これらの本を読むのをやめて、かつて読んでいた本の内容や、以前よくふけた無益な考えや、頭に浮かんだままのこうした多くのことについても思いめぐらすこともあった。

そのうち、あわれみ深い神は、これらの無益な考えに取って代わる別の考えを、イグナチオが最近読んだあの二冊の本から彼の心に入れてくださった。こうしてイグナチオは、わたしたちの主・キリストと聖人たちの生涯について読んだとき、「聖フランシスコがしたことをわたしがしたらどうだろう、聖ドミニコがしたことをわたしがしたらどうだろう」と自問し、考えるようになり、いろいろと思いめぐらした。かなり長い間、このように考え続けたが、やがて別のことが間に入って、またあの無益で世俗的なことがらを思いめぐらすようになった。このような考えが入れ替わりたち替わり、かなり長い間続いた。

しかし、この二種類の考えの間には次のような違いがあった。すなわち、彼は世俗的なことを思いめぐらしているうちは、大きな楽しみを感じたが、それに疲れてやめると、憂鬱で心が枯れたような感じしか残らなかった。一方、聖人たちが実践したような苦行をしようと考えたときには、それらについて思いめぐらしている間だけ楽しみを感じたのではなく、考えるのをやめても喜びが続いたのである。彼はこのような違いに気づかず、その重要性がわからなかったが、ある日、心の目が開かれ、自分の体験から、一方の考えからは憂鬱な気持が生まれ、もう一方の考えからは喜びが残ることを悟って、初めてこの違いに驚いた。これが、神に関することがらについてたどりついた、彼の最初の洞察であった。

その後、霊操に入ってから、彼はこのような体験から、霊動の識別について後に弟子たちに教えたことを学び取ったのである。」

ルドピコ・ゴンザレスが聖人自身から聞いて著した『聖イグナチオ伝』

「散歩したり歩いたり走ったりするのを体操というが、同じように、靈魂を準備し整

えるあらゆる方法を霊操というのである。その目的は、まず、乱れたあらゆる愛着を棄てることであり、その後、靈魂のたすかりのために、自分の生活をどのように整えるか、ということについて神のみ旨を探し、確かめることである。」

イグナチオ・デ・ロヨラ『霊操』1